

II-2-2

伝統漁法石干見の保存と活用

- 新たな研究へ向けて -

関西学院大学・機構共同研究者
田和 正孝

はじめに

潮の干満差をたくみに利用した伝統的漁法石干見（イシヒビ）の復元と活用が九州各地で始まっている。地域の人々の生活や生業に関わる身近な風景を文化財として評価する「文化的景観」の考え方が定着し、そのような景観を保存したり、再生したりする動きと関係が深いと考えられる。

大分県宇佐市の長洲海岸にはかつて大小7基のイシヒビが存在した。イシヒビ漁は1955年頃までおこなわれたという。その後、イシヒビは荒れるにまかされ、石積みの跡がわずかに残るにすぎなかった。そこへ2006年10月、「長洲の町のこれから」を創造する目的で結成された「長洲アーバンデザイン会議」が中心となり、イシヒビが復元された（写真1）。これを環境教育や魚とりを楽しむ体験型観光に活用しようとしたのである。この団体とともに、宇佐市役所商工観光課が外部との調整役を担っている。石干見が地域貢献やツーリズムのための装置として、いま脚光を浴び始めているといえよう。



写真1 大分県宇佐市長洲に復元されたイシヒビ（2007年）

ところで、民族学や地理学において、1970年代でいったん終息していた石干見に関する研究が、あたかも上記の動きと連動するかのごとく1990年代から再び繰り返されている。石干見の保存と活用を考えることや、研究がこれまでどのように進められてきたのか、今後いかなる研究が可能かについて検討することが必要となってきているのである。小論では、以上のことをふまえたうえで、日本におけるこれまでの石干見研究を回顧するとともに、石干見研究の新たな可能性について具体例を提示しながら考察する。

1 石干見研究の系譜

(1) 西村朝日太郎の貢献

石干見漁法が研究者によって初めて注目されたのは、1930～40年代である。喜舎場（1934）が沖縄八重山の石干見（カキイ）、吉田（1948）が有明海の石干見（スクイ）について記述している。しかし、本格的な石干見研究の確立は、海洋民族学者の西村朝日太郎が調査に着手しはじめた1950年代以降のことである。

西村は、1950年代から70年代にかけて、大学院生や学生をともなって、九州各地、奄美諸島、沖縄諸島において石干見の調査・研究を活発におこなった。1957年に有明海の干潟漁撈文化の調査を開始し、潟板と石干見の重要性に着目している。1958年には有明海から熊本県宇土半島、1959・68年には沖縄先島諸島へ赴いている（小川，1980）。西村は、石干見を人間が沿岸部に居住しはじめた初期に潮だまりに取り残される生物を見て考案したきわめて古い構築物であると考え、この漁法を「生ける漁具の化石」あるいは「生きている漁具の化石」と呼んだ（西村，1969；1979）。

西村らが中心にすえた課題は、南太平洋に広く分布する干瀬というエコシステムが有する漁撈文化の解明であった。石干見はこのような漁撈文化におけるメルクマールとして注目され、その構造や利用方法（漁期、漁法、漁獲対象とその分配方法など）、所有形態、法的関係性などが考察の対象となった。西村らの調査は、その後、八代海、豊前海、五島列島、韓国南部、宮古列島（宮古島と伊良部島）、八重山諸島小浜島などにおよんだ。石干見の組織的かつ集約的な調査研究が実施されたのである（小川，1980；西村，1987）。西村と10名近い「門下生」は、約15年間にわたって石干見の調査を続けた。調査の組織化と資料の蓄積量からいえば、石干見研究はこの時期にピークを迎えたといえる。

なお、西村らとともに、同じ頃に石干見の研究をになった二人の研究者を特記しておきたい。民俗学者の小野重朗と地理学者の藪内芳彦である。小野（1973）は、奄美大島の北部、笠利湾周辺および南部の瀬戸内町における石干見（カキ）の状況を報告している。有形民俗資料ともいえるカキを文化財として保存することの重要性を早くに指摘していることは注目すべきである。藪内（1978）は、イギリスの海洋人類学者ホーネルの漁撈文化人類学的研究（Hornell, 1950）をうけて、石干見の世界的な分布圏を描いている。20世紀代前・中期にかけて発表されたアジア・太平洋各地の民族誌の中にある石干見の記述などを丹念に集め、一部については研究者から情報を得て、分布域を確定したものと考えられる（田和，1998；2007b）。

(2) 石干見研究の停滞

石干見に関する研究は、1980年代以降、停滞気味となる。筆者は、その最大の理由として、1960年代から70年代にかけて沿岸域で大規模な開発が始まり、また養殖漁場の拡大などによって石干見漁場が急激に減少し、これに応じて学界での石干見への注目度が低下したことをあげたい。漁船漁業が中心となり沿岸の小規模漁業への注目度が小さくなったことや、西村らによる研究がすでにひとつの到達点にいたったことも、石干見研究への関心の低下と関係していたと考えられる（田和，2002）。

1980年代には、コモンズ論に注目した多辺田（1986）による石干見研究が唯一の成果であっ

た。多辺田は、石垣島においてイノー（サンゴ礁湖）の利用実態を調査し、農民による地先の海の利用慣行とコモンズ論との関係性を考えた。その結果、「海の畑」たるイノーでの農民的漁法として続けられていた石干見漁の重要性を明らかにし、地区住民の生存権とかかわるイノーの入会権が漁業権の一部放棄によって侵害されたことの問題性を指摘した。多辺田はその後も海と陸という両義性を有するイノーや海浜（干潟・なぎさ）空間に関心をいだき、「農民の漁法」として存在し続けた各地の石干見を調査した（多辺田，1995）。石干見の利用・管理形態は、陸の空間である農地の所有関係（地主・小作制の展開）や農作業の共同性（結や模合の強弱）を反映していたことを見出し、これらを地域住民の共同のもとで永続性を持って生かすべきであると主張したのである。

（3）近年の石干見研究とその方向性

1980年代後半から1990年代にかけて、各地に残る石干見に関する民俗学的報告が再びなされた。鹿児島県出水、阿久根の石干見（小野，1988）や宇土半島周辺の石干見（富樫，1991；1992）についての報告がそれらである。また、2000年以降には、矢野・中村・山崎（2002）、矢野・中村（2007）による沖縄県小浜島の石干見、水野（2002，2007）による奄美諸島および五島列島の石干見に関する海洋人類学的研究が発表された。彼らは、1960年代から70年代にかけて西村とともに石干見研究を進めた研究者であり、論文で用いられたデータのほとんども当時の調査で収集されたものである。しかし、彼らが試みた石干見の計測や聞き取りによる情報収集からは、当時の研究水準の高さと精緻さを改めて知ることができる。また、今後の研究で用いられるべき重要な調査方法が提示されているといえる。田和（2007b）は、昭和初期における有明海の石干見（スクイ）の利用形態を、当時の漁業権資料を用いて分析している。

これらに加えて、石干見が文化財として保護対象となっている状況についても議論が始まっている（田和2007a；2007b）。石垣島白保では石干見（カキ）が復元された。上村（2007）は、この事業を進めようとする主体と関係諸機関との間でどのような調整が行われたか、復元のプロセスにおいてどのような制度的・技術的な課題が見出されたかを検討した。さらに石干見という文化資源を活用するにはどのような課題があるのかについて議論している。詳細は、次章にゆずるが、上村によって石干見研究における新たな可能性が示されたといえる。

2 石干見研究の問題群—研究の可能性と課題—

日本における近年の石干見研究をみると、その特徴として、漁業史的考察、分布と現況について問う研究、さらには、文化資源・文化財としての石干見をめぐる研究、の3点をあげることができる。とくに、伝統的な漁業文化の見直し、沿岸域・河口域の環境保全やそれに付随する環境教育などが注目されるなかで、さらなる研究の可能性と課題が見出せる。本章では、具体的な事例をまじえながら、①石干見研究の史的展開と系譜論、②石干見データベースづくり、③石干見の保存・再生・活用をめぐる議論、について今後の研究課題を検討したい。

（1）石干見研究の史的展開と系譜論

日本を含む東アジアにおける近代期の石干見漁業の姿が、次第に明らかになりつつある。台湾

では1910年代の澎湖列島北部における石干見漁業が、漁業権許可に関する申請書類を用いて分析され（田和，2006）、韓国の石干見に関しては、日本の漁業が活発に進出した明治末期に編まれた『韓國水産誌』（1908～1910）の記述内容から当時の状況が分析された（田和，2007c）。日本では、有明海の石干見漁業の状況が昭和初期の定置漁場に関する文書資料を通じて考察されている（田和，2007b）。このように、かつての石干見漁業の状況を解明する作業が今後も必要である。明治末期から昭和初期にかけての史・資料類をさらに詳細に分析してゆくことによって、石干見漁の位置づけが可能となるし、当時の東アジアにおける石干見文化の理解が増すことにもなると考えるからである。

漁業権資料を発掘することや地域漁業に関する報告書を渉猟しながら、当時の石干見漁業の状況について理解することも求められる。大分県宇佐市長洲では、かつて石干見を所有していた旧家から明治・大正・昭和期の漁業免許状や石干見漁場図が発見されている（高橋，2006）。筆者も長崎県諫早市の石干見の漁業権譲渡に関する資料を入手している。国文学資料館が所蔵する『熊本県水産誌 卷之六』（1883）には石干見と思われる漁具を用いた漁撈活動の絵図が残されている。このような史料や漁業絵図、漁撈活動の生業図といった絵画資料を組み合わせながら分析する研究手法（橋村，2009）も石干見研究に採り入れなければならない。ただし、80～100年前の状況を理解するためにはいかにすればよいのか、すなわち歴史的な研究方法の議論、さらには歴史史料と現代の石干見から得られる情報との関係性を探ることも同時に視野に入れておかなければならない。また石干見の語源についてもまだ不明な点が多い。このことも系譜論と合わせて考察されるべきであろう。

（2）石干見データベースづくり

各地の石干見漁業の状況を明らかにする作業は石干見の保存と活用を考えるうえで基礎となる。たとえば、台湾の澎湖列島では地元在住者の協力によって石干見（石滬）の悉皆調査がおこなわれ、その報告書が刊行された（洪，1999）。このような石干見に関するデータベース作りは地域における石干見の分布状況を考え、呼称や漁具の構造、利用形態、所有形態などを比較検討するためには不可欠である。以下では沖縄の状況を例にそのことについて考えてみよう。

沖縄諸島にはかつて多数の石干見（一般にカキと呼ばれる）があった。しかしその正確な数や当時の分布状況は十分にはわかっていない。そのなかで武田（1994）が沖縄における石干見（カチ（カキ））の分布図（図1）を描いているのは唯一の成果である。武田によると、情報は市町村市史（誌）類を渉猟して得られたものであるという。カキは、本島では南部太平洋側および東シナ海側のいずれにも分布した。離島部では、本島周辺、宮古列島、八重山諸島に分布していた。しかし、第二次世界大戦後、護岸工事などによってカキの損壊が進んだ。海岸部がアメリカ軍に接収されたため、そこへの立ち入りが一時期、制限されてしまったこともカキの崩壊に影響した。さらに木綿網やナイロン網を用いた漁法が普及したこともカキの利用を疎遠にしまった。また、カキが日々の「おかずとり」のための装置であったことから、漁業活動や漁獲量についてはほとんど記録されなかったこと、定置漁具としての漁業権申請が関係機関になされなかったことなど記録上の問題も、カキに関する情報が残りにくかった理由と考えられる。

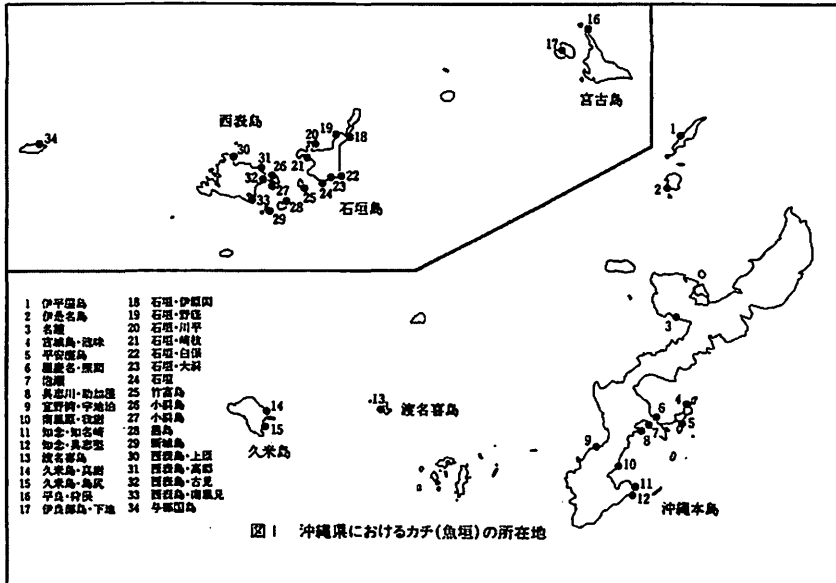


図1 沖縄県におけるカチ(魚垣)の所在地

図1 沖縄における石干見の分布 (武田 1994)

武田が描いたカチの分布図はきわめて精緻であるが、その後の文献調査によって、本島では北谷町や金武町沿岸部、八重山では石垣島宮良、波照間島にも石干見が存在したことが確認できた。石干見に関する研究量としてはもっとも蓄積が大きい沖縄の石干見に関連する諸論文や報告書をあらためて渉猟し、また各地の市町村史(誌)類に所収されている記述をまとめるとともに、聞き取り調査などをすすめ、石干見の数や分布域を明らかにする作業がまだ残されているのである。そのうえでイノー(サンゴ礁湖)の面積と石干見の分布域との関係や構築技術の差異、所有関係、利用形態、損壊の時期およびその理由などを整理しデータベース化することが求められる。

(3) 石干見の保存・再生・活用をめぐる議論

九州各地において、石干見を保存し、再生、活用しようとする動きがみられる。本来の石干見がほとんど消滅しかけている状況のなか、かつて存在した干潟の自然や生産力を再考する環境教育のシンボルとしても石干見の文化財的価値が見直されている。また、「魚とり」という行為の面白さ、さらには石干見が有する「あそびの空間」を見出し、ひいては観光資源として利用しようとする事なども、再生・活用の背景にあると考えられる。

長崎県諫早市高来町にあるスクイは、魚とりが続けられている石干見である(写真2)。これはもと個人所有であったが、1987年、旧高来町の文化財に指定された。2006年には沖縄県宮古島市伊良部島に残るカツ(写真3)とともに、水産庁が選定する「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」にも選定された。スクイ所有者のもとには、「地元の石干見を復元したい」として見学に来る人びともいる(竹島, 2006)。

2003年6月には、農林水産業に関連する文化的景観の保存・整備・活用に関する検討委員会によって「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書」が提出された。そのなかにある「漁場景観・漁港景観・海浜景観」の重要地域として、鹿児島県大島郡竜郷町の石干見(垣)漁、沖縄県八重山郡竹富町小浜島の石干見(海垣)、重要地域以外の二次調査対象地域として諫早市のスクイ漁場が指定されている。大分県宇佐市の長洲海岸では、かつて存在した石干見(イシヒビ)を環境教育や体験型観光に活用する目的で復元が始まっていることも、冒頭で

指摘したとおりである。長崎県五島市では海浜のキャンプ村の地先において石干見（スケあるいはスケアン）が観光用に再生され、そこでは体験漁業が実施されている（写真4）。長崎県島原市でも石干見が復元され（写真5）、それを今後ツーリズムの中でどのように位置づけるべきか検討中である。

沖縄県石垣市白保では、2005年9月に「白保魚湧く海保全協議会」が発足した。これはサンゴ礁を保全するとともに、持続的に利用し、地域振興につなげることを目指して、地元の有志によって設立されたものである。同協議会は、発足と同時に「海とともにある持続的なシンボルづくりとして、自然とともに生きて来た文化遺産である「海垣（インカチ）」を復元し、体験型・文化施設として活用する」ことを決定した（上村，2007）。2006年にはインカチ1基が復元された（写真6）。かつて地元ではインカチから多くの食料を得ていた。地域に住まう人々がそのことを記憶し、生活にかかわっていたインカチを白保の文化として次世代に残したいという強い気持ちの表れである。



写真2 長崎県諫早市北高来町水ノ浦に残るスキイ（2010年）



写真3 沖縄県宮古列島伊良部島佐和田のカツ（2005年）



写真4 石干見内での体験漁業：長崎県五島市富江（2009年）



写真5 長崎県島原市に復元されたスキイ（2010年）



写真6 沖縄県石垣市白保に復元された竿原（ソーバリ）のインカチ（2010年）

以上のように、石干見をめぐる保存・再生・活用に関しては、漁業、観光（ツーリズム）、文化遺産の3つの要素が関与している（図2）。それらがどのように関わっているのか、各地域が有する課題について考えることが今後求められる。

石干見の復元と利用に付随する「真正性」についてもふれておきたい。佐野（2009）は、復元された石干見に対して、それがもはや漁具としての色彩が薄れ、体験学習・海を楽しむためのツールとして新たな役割を担っているという。復元自体にも、かつて存在したものと同一場所に復元するものや、別の場所に新しく造るものなど、地域ごとに様々な事情がある。これらのことから復元すべき伝統文化とはいかなるものであるかを考え、復元されたものにいかなる意味が付与されるかなど、新しい議論の展開が求められる。

2009年1月、宮古島市伊良部島佐和田の石干見(カツ)所有者に聞き取りをしたが、近年、日本のメディアからの取材が増えていること、また台湾、韓国のメディアから取材があったこともわかった。日本のテレビ取材では、静かに腰をおろして袋網(カツアン)を据えるという本来の魚とりの方法を見せず取材がおこなわれたという。台湾の撮影グループは、漁業活動に適した潮時を外しての取材であった。所有者は結果的に、通常は漁をおこなわない潮が引ききっていない時間帯にカツに入ることを強いられた。日本のメディアによる漁業活動の写真取材では、クバガサ(クバの葉で作られた円錐形の笠)をかぶり沖繩らしさを演出させられ、アングルの関係から通常は腰を下ろさない側に座って網を入れたこともあったという。また、カツというローカルな名称がいつの間にか魚垣(ウオガキないしはナガキ)という一般名称で呼ばれるようになりつつあることも所有者は指摘した。

以上の事例からも明らかなように、石干見には、文化資源をいかに見て、いかに考えるかという文化研究に関わる問題も潜んでいるのである。

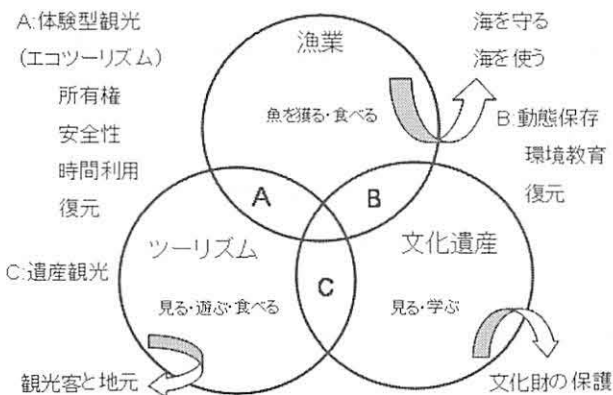


図2 石干見をめぐる保存・再生・活用の関係モデル



写真7 大分県宇佐市長洲で開催された第1回石干見サミット(2008年3月)

おわりに

石干見への関心は、近年、学界のみならず行政や地域コミュニティからも高まっている。これに応じるように、2008年3月、宇佐市において、「第1回日本石干見サミット」が開催された(写真7)。そこでは、石干見の過去と現在の状況が話し合われ、石垣市白保のインカチの復元と再生事業、五島市富江のスケアンを利用した体験型観光漁業の取り組み、宇佐市長洲のイシビビをめぐる繰り広げられる地域おこしとツーリズムへの期待などが報告された。また、海の文化的景観としての石干見の重要性、石干見の維持管理と動態保存の可能性なども議論された。

2009年5月には、五島市富江において「第2回すけ網（石干見）サミット」が開催された。筆者もこれに参加し、地域の人々が石干見をいかにして守り、学び、考え、どう利用すればよいかについて若干の意見を提示した。再生、活用のモデルを考えるにあたって、漁業としての石干見、文化財としての石干見、ツーリズムの中での石干見という3つの要素を設定した（前掲図2）。これらに加えて、新たな視点として、石干見と里海に関する考え方が提示された。里海とは、「人手が加わることによって、生産性と生物多様性が高くなった海」と定義される（柳，2006）。生物の多様性は、適度な攪乱がある場合にもっとも高くなるといわれている。石干見を構築することで、石垣に海藻類が繁茂し、さらに多種多様な生物がそこに蛸集する可能性があるというのである。石干見自体の再生・活用という領域から、海の再生・活用にかかわる石干見の価値づけがなされ始めている。

石干見は今後いかにして保存されたり再生されたりするのであろうか。地域振興や地域文化の表象の問題のみならず、生物保護や環境保全の装置としての意義についても、石干見研究の今後の展開が注目される。

参考文献

- ・小川 博（1980）「早稲田大学海洋民族学センター記事」, 史観103, pp.34-47.
- ・小野重朗（1973）「奄美大島のカキ（石干見）」, 鹿児島県文化財保護課編『鹿児島県文化財調査報告書20』, 鹿児島県, pp.25-40.
- ・小野重朗（1988）「出水地方の民俗（その6）出水・阿久根のスキ（石干見）」, 北薩民俗8, pp.14-17.
- ・上村真仁（2007）「石垣島白保「垣」再生—住民主体のサンゴ礁保全に向けて—」, 地域研究3, pp.175-188.
- ・喜舎場永珣（1934）「八重山における旧来の漁業」, 島2（喜舎場『八重山民俗誌 上巻・民俗篇』, 沖縄タイムス社, pp.50-78）.
- ・洪 國雄（1999）『澎湖的石滬』, 澎湖縣立文化中心, 257p.
- ・佐野静代（2009）「田和正孝編『石干見 最古の漁法』」, 史林92-1, pp.240-244.
- ・高橋陽子（2006）「『石ひび』の再生とともに海とのつながりも復活」, 『山・川・海の「遊び仕事」』（現代農業2006年8月増刊）, pp.222-231.
- ・竹島真理（2006）「楽しいからこそ続けた干潟の海の石干見漁」, 『山・川・海の「遊び仕事」』（現代農業2006年8月増刊）, pp.208-221.
- ・武田 淳（1994）「イノー（礁池）の採捕経済—サンゴ礁海域における伝統漁法の多様性」, 九学会連合地域文化の均質化編集委員会編『地域文化の均質化』, 平凡社, pp.51-68.
- ・多辺田政弘（1986）「イノーの経済と入会漁業—新石垣空港問題への一視角」, 公害研究16-1, pp.33-40.
- ・多辺田政弘（1995）「海の自給畑・石干見—農民にとっての海」, 中村尚司・鶴見良行編『コモンズの海』, 学陽書房, pp.71-143.
- ・田和正孝（1998）「石干見漁業に関する覚え書き—台湾における石滬の利用と所有」, 秋道智彌・田和正孝『海人たちの自然誌』, 関西学院大学出版会, pp.153-182.
- ・田和正孝（2002）「石干見研究ノート—伝統漁法の比較生態」, 国立民族学博物館研究報告27-1,

pp.189-229.

- ・ 田和正孝 (2006) 「1910年代における澎湖列島北部の石干見漁業—台湾総督府文書石滬漁業権申請書類の分析を通じて—」, 人文地理58-1, pp.73-90.
- ・ 田和正孝 (2007a) 「東アジアの石干見研究—まとめと課題」, 田和正孝編『石干見』, 法政大学出版局, pp.285-296.
- ・ 田和正孝 (2007b) 「伝統漁石干見の過去と現在」, 小長谷有紀・中里亜夫・藤田佳久編『林野・草原・水域』, 朝倉書店, pp.194-207.
- ・ 田和正孝 (2007c) 「韓国の石干見に関する覚え書き」, 関西学院史学34, pp.23-43.
- ・ 富樫卯三郎 (1991) 「熊本県宇土半島周辺のスキ—原始的漁法・漁場の残存—」, 民俗文化3, pp.133-139.
- ・ 富樫卯三郎 (1992) 「宇土半島のスキを訪ねて」, 宇土市史研究13, pp.13-19.
- ・ 西村朝日太郎 (1969) 「漁具の生ける化石、石干見の法的諸関係」, 比較法学5-1・2, pp.73-116.
- ・ 西村朝日太郎 (1979) 「生きている漁具の化石—沖縄県宮古群島におけるkakiの研究」, 民族学研究44-3, pp.223-259.
- ・ 西村朝日太郎 (1987) 「喜舎場永珣と海洋民族学」, 『八重山文化論叢』, 喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会, pp.1-51.
- ・ 橋村 修 (2009) 『漁場利用の社会史』, 人文書院, 272p.
- ・ 水野紀一 (2002) 「南西諸島の石干見漁撈」, 早稲田大学高等学院研究年誌46, pp.13-27.
- ・ 水野紀一 (2007) 「奄美諸島および五島列島の石干見漁撈」, 田和正孝編『石干見』, 法政大学出版局, pp.115-150.
- ・ 柳 哲雄 (2006) 『里海論』, 恒星社厚生閣, 102p.
- ・ 矢野敬生・中村敬 (2007) 「沖縄・小浜島の石干見」, 田和正孝編『石干見』, 法政大学出版局, pp.55-114.
- ・ 矢野敬生・中村敬・山崎正矩 (2002) 「沖縄八重山群島・小浜島の石干見」, 人間科学研究15-1, pp.47-83.
- ・ 藪内芳彦 (1978) 「漁撈文化圏設定試論」, 藪内編『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』, 風間書房, pp.680-683.
- ・ 吉田敬市 (1948) 「漁業と自然環境—有明海の石干見とアンコー網漁業」, 人文地理創刊号, pp.31-40.
- ・ Hornell, J. (1950) *Fishing in Many Waters*. Cambridge University Press, 210p.